

## 「神の御心にかなった悲しみは救いに」

(新約聖書 (Ⅱコリント7の10))

神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらします。

To be distressed in a way that God approves leads to repentance and then to salvation with no regrets; it is the world's kind of distress that ends in death. (NJB) .

私たちが生きていくときに、何らかの悲しみはつねにつきまとう。悲しみはそれがひどくなると耐えがたい苦しみとなり、生きていけないほどになる。

私たちが罪を犯してしまったとき、また、愛するものを失うとか、難しい病気、自分がひどく見下されたり、差別されたときなど、さまざまのときに、人は、深い悲しみに陥る。その悲しみや苦しみは深いほどに生きる力を失わせる。また、そのような悲しみを与えたのが、特定の間人であればその相手に深い憎しみを抱くようになることもある。そして憎しみを持つことはその人の魂にとってのさらに害を与えることになり、二重の打撃を受けて魂は命を失う。世の悲しみは死をもたらすと言われているとおりである。こうした悲しみの根源に、「自分」がある。私たちの心が自分というものから離れて見るができないかぎり、この世の悲しみや苦しみが大きいほど魂は死に至る。

しかし、私たちがそうした悲しみの中心に神を置くとき、罪による悲しみをも神に立ち返って赦しを受けることができるし、さまざまの悲しみも、愛の神からのものとして受け取ることができるように導かれる。そして、どんなに不可解でもきっとその背後によき意図があるのだ、と信じていくとき、言いかえると、神への方向転換によって私たちは命を与えられる。神はそうした方向転換を祝福して実際にその悲しみや苦しみを乗り越える力を与えて下さる。(悔い改めとは、原語ではメタノイアであり、これは何らかの個々の罪を悔い改めるといったことでなく、本来の意味は、魂の神への方向を意味する。)

このことは、使徒パウロが、「神を愛する者たちには、万事が益となるように共に働く」(ローマ8の28)と言っていること共通している。神を愛するの でなかったなら、この世の悲しみ、苦しみはそれが深いほど回復できなくなり、最終的には死へと通じている。

主イエスも、「ああ、幸いだ。悲しむ者たちは！ なぜならその人たちは（神によって）慰められるからである。」（マタイ5の4）と言われて、悲しみを通して、神の励まし、慰めを受けることを約束してくださった。

私たちの魂に対して根本的ないやしの力を持つのは、神に立ち返ることによって与えられる神の愛なのである。



## 野草と樹木たち

ヒュウガミズキ（マンサク科）

2010. 3. 16 （わが家の植栽）

このヒュウガミズキは、3月にこのような、黄色の花を咲かせます。高さは、2～3メートルほどの木です。木々の芽がまだ、ほとんど出ていないころ、この木自身、葉が出るまえに咲き始めるもので、同じなかまのトサミズキよりは、

花の穂が小さく、落ち着いた感じのする花です。春の到来を告げるような初々しい黄緑がかった花で、新しい命の季節を告げているような雰囲気があります。

これはもともと宮崎県の日向地方で自生があるということから名前が付けられたものですが、近畿北部の福井、富山、岐阜などに多くみられるとのこと。

こうした春先に咲く花によって私たちは、春の到来を知らされ、いのちの芽吹く季節への希望を強められます。この世にはさまざまの問題があり希望のないような状況があちこちにみられますが、こうした人間よりはるか昔から存在して、変ることなく花を咲かせ続ける自然の姿は、私たちへのメッセージが込められているのです。

それは、それらを創造した神の無限の力、静けさのなかにあって、つねに新しいものを生み出される神に立ち返るようにとの呼びかけだと感じます。（文、写真とも、YOSHIMURA